ちょっとエッセイ④　～真の哲学者　立花隆～

令和三年七月三日

知の巨人と称された立花隆氏の訃報を新聞で知った。今年四月三〇日に享年八〇歳だった。彼を初めて読んだのは、修士課程入学直後だったと思う。宇大生の頃は、そもそも本を買うような学生ではなかったので、存在すら知らなかった。古本屋で「知のソフトウエア（講談社現代新書）」を手にした…なんだこの人は！第一印象である。一九四〇年に生まれで、一九六四年に東大仏文科を卒業後、文芸春秋に入社するが、勉強時間が取れないストレスからか？すぐに退社。一九六六年に東大哲学科に学士入学する。つまり、東大に二回合格したということである。それだけでも既に「巨人」だ。普通だったら大学院に入学するんじゃ。とにかく勉強が大好きで。だったら学者になればいいと普通なら考えるだろう。

とにかく知りたいという欲求に忠実に生きる道を求め続けた結果、知の巨人と呼ばれるようになった。古代ギリシャ語「φιλοσοφία、philosophia」は「愛知」を意味する。知を愛すること。すなわち哲学です。全身で知ることに向かい、知ることを愛した人。哲学研究者はあまたいるだろう。しかし、本物の真の哲学者はそうはいない…その意味で立花隆は数少ない真の哲学者だったと思う。今も何度も読み返す文庫本がある。『脳を鍛える～東大講義「人間の現在」～（新潮文庫の）』である。東大生を前に知の巨人ぶりを見せつけた伝説の講義録です。今回は、立花隆の一読者でありファンとして、追悼の思いを込めて、これまでに影響を受けた言葉を振り返りながら独り言を綴ってみたい。二回目の講義で大学の存在意義についてこう語っている。

人類は、知の総体をみんなで次の世代に伝えていくという伝承作業を共同で行っているわけです。しかし、知は刻一刻と古くなり、陳腐化し、誤謬だらけとなる宿命を負っています。知は時間とともに劣化するんです。その結果、知の再生産過程は、放っておくと、必ず縮小再生産過程に入ってしまいます。（中略）絶えずそこに新しい知を付け加え、知の総体をより大きなものに、より堅固なものにしていく、知の拡大再生産過程にしていかなければならないんです。大学には、この知の拡大再生産過程の最も重要な担い手であるという位置づけが与えられていると思います。

立花は、あらゆる著書で、知の総体という言葉を頻繁に使う。「人類が何を知っていて、何を知らないのか？」そこに向かって夢中で知ることを自らの職業にした人ですね。当然そこに文理の壁はない…人類の知の最前線をひたすら追いかけることが、たまらなく面白かったんでしょう。ある特定の領域ではなく、あらゆる領域が明らかにしている知を、すべて知りたいと思う欲求を満たすために…学者では満足できなかった。それでも、「自分はモノを知らない。勉強不足だ。」と秘書に漏らしていたという。また、「ぼくはこんな本を読んできた（文春文庫）」で立花はこんな趣旨のこと言う。

残された時間と知りたい事の量に焦りを感じてきた。三〇歳代までは、映画を見たり、パチンコに行ったり、友人と遊んだりもしていた。最近はまったくないね。みんなが楽しいと思うことが、自分には楽しくない。勉強しているときが一番楽しい。遊びたい欲求よりも、勉強したい、知りたい欲求の方がはるかに強いんです。残された時間をすべて勉強に充てたとしても、残念ながら私はその多くを知らずに終わるだろう。

立花隆は、百の勉強から一を書くタイプの物書きであった。彼の脳にはどれほどの知がインプットされていたのだろうか。それらがアウトプットされることはもう叶わないのだろうか…。立花隆につぐ哲学者が生まれることを心から願いつつ…。